

蒼洋の城塞5

マーシャル機動戦

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地図・図版 安達裕章
編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章 東方の脅威

9

第二章 タスク・フォース 任務部隊集結

25

第三章 「見殺しに忍びず」

67

第四章 「彗星」すいせい 猛然、てんざん「天山」 乱舞

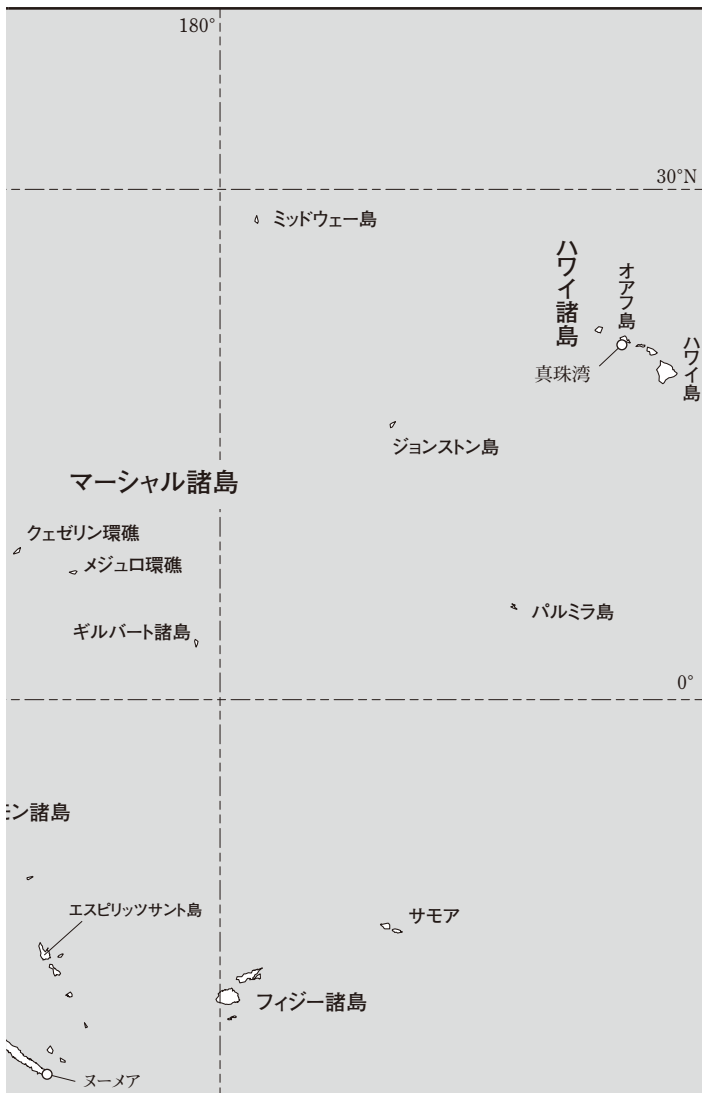
107

第五章 「武蔵」むさし 咆哮

165

第六章 新空母「陸奥」むつ

227

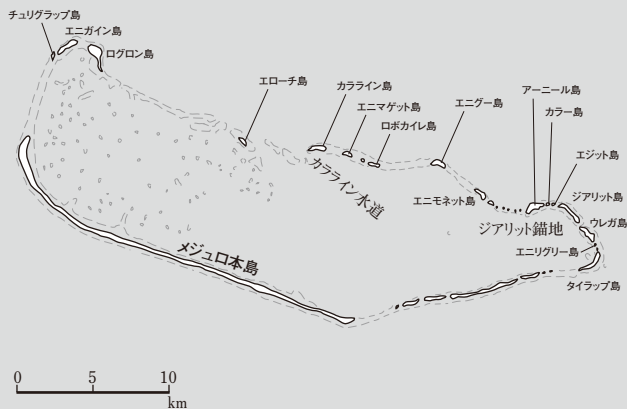


南西太平洋要図

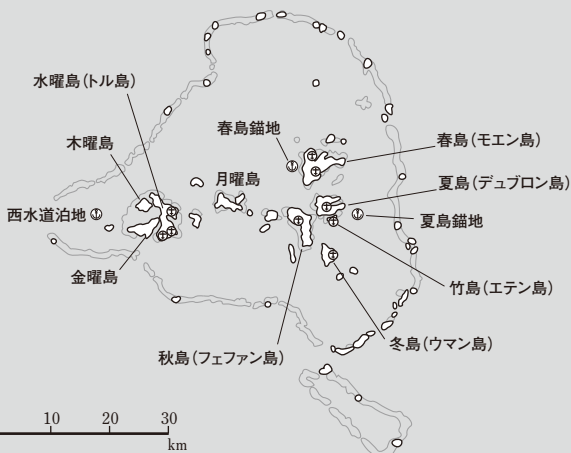
150°E



メジュロ環礁詳細図



トラック環礁詳細図





蒼洋の城塞
マーシャル機動戦

5

第一章

東方の脅威

1

環礁^{かんしょう}の南西部には、細長い島が横たわっていた。

南北に狭く、東南東から西北西に向かつて、ほぼまっすぐに伸びている。

起伏^{とほ}に乏^{とほ}しいため、東端から西を見ると、海上に敷かれた一本の道が、どこまで続いているように見える。

北側から南東部にかけては、大小の島々が連なり、巨大な礁湖^{しょうこ}を形成している。

礁湖^{しょうこ}の西部は点礁^{てんしょう}が多く、泊地^{はくち}には適さないが、東半分だけでも十分な面積があり、四万トクラス^{せんまん}の戦艦^{せんかん}や、艦上機^{かんじょうき}を満載した正規空母^{くうぼ}が入泊できるだけの水深がある。

艦隊の泊地のために、あつらえたような環礁だ。

マーシャル諸島の東部に位置するメジロ環礁は、長く日本の委任統治領となっていたが、一九四四

年一月二〇日を境^{さかい}に日章旗^{にっしょうき}が一掃^{いつそう}され、現在はアメリカ合衆国の占領^{せんりょう}下にあることを示す星条旗^{せいじょうき}が、全ての島に立ち翻^{たひるがえ}っていた。

アメリカ合衆国太平洋艦隊司令官チエスター・ニミッツ大將は、メジロ本島の東端に足を降ろすなり顔をしかめた。

メジロは北緯七度に位置し、完全な熱帯圏に属する。

太陽の光は、暴力的なまでに強烈^{きやうれつ}だ。天空から光の形を取った矢が、絶え間なく降り注いでいるような気がする。

太平洋艦隊の司令部が置かれているハワイも、常夏^{とこ}の島として知られているが、陽光はこれほど強くない。

加えて、湿度が非常に高い。

ハワイの空気は全般にからりとしているが、メジロの空気は粘^{ねば}っているようだ。

酷^{こく}な環境にも関わらず、海軍設営隊^{しんぺいづ}は活発に動い

ている。

メジユロ本島では、細長い地形を活かした飛行場の建設が進められ、平らに整地された部分には、有孔鉄板が敷き詰められている。

環礁東部にあるタイラップ島やジアリット島では、ブルドーザーやパワーショベル等の土木機械が活発に動き回っているらしく、建設現場に特有の喧噪がメジユロ本島にまで伝わって来る。

礁湖の東側にあるジアリット錨地に錨を降ろしているのは、駆潜艇、哨戒艇、掃海艇、敷設艇等の小型艦艇や、輸送船を護衛してきた護衛空母、駆逐艦だ。

環礁の北側中央にあるカラライン水道の周辺では、何隻もの駆逐艦が、城門を守る門衛のように目を光らせている。

メジユロ環礁は、着実に太平洋艦隊の前進基地へと姿を変えつつあった。

「御苦勞だった、ミスター・ターナー」

出迎えた第五^T四^F任⁵務⁴部隊司令官リッチモンド・ターナー少将に、ニミッツはねぎらいの言葉をかけた。マーシャル諸島の攻略を担当した指揮官だ。

上陸作戦の専門部隊である第五水陸両用軍団や、その支援を担当する各任務群を指揮下に置いている猛者揃いの海兵隊員を統率するだけに、強面の指揮官であり、部下からは「おっかないターナー」と呼ばれていた。

「海兵隊も、この地では実力を発揮する機会がなかったようだね」

「おっしゃる通りです。メジユロ環礁には、ただ一人の兵も配置されておらず、我が軍を迎えたのは、古くから住んでいる島民だけでした。マーシャル諸島の行政の中心地はクエゼリン環礁ですが、メジユロはそこから四〇〇哩以上離れています。日本軍は、この地に守備隊を配置しても、兵力を分散させるだけであり、相互の連携も難しいと考えて、最初から放置したのですよう」

ターナーは応え、小さく笑って付け加えた。

「マーシャル諸島自体が、日本にとつては、過ぎた土地だったのかもしれませんが」

マーシャル諸島には、世界最大の珊瑚礁であるクエゼリン環礁を始めて、艦隊の泊地に使用可能な環礁が多数ある。

日本の国力では、その全てを守れるだけの兵力は配置できない。

前大戦の結果、日本はマーシャル諸島の統治権を手に入れたが、国力の小さな国には分不相応だったと、ターナーは考えているようだ。

「日本は手を広げすぎたのだ」

ニミッツは、開戦以来の戦局を思い起こしながら言った。

「ポート・モレスビーの占領、及びオーストラリアを連合国から落伍させようとした試みが、彼らの墓穴を掘ることになった。珊瑚海での兵力の消耗がなければ、彼らはマーシャルに充分な守備兵力を配

置し、我が軍を迎え撃っていたかもしれない」

「枢軸国に共通する動きですな。己の国力もわきまえず、野放図に戦線を拡大して、破綻に至るのは」

ターナーの言う通りだ、とニミッツは腹の底で呟いた。

イギリスを放置したまま、広大な領土を持つソ連に侵攻し、無謀な二正面作戦に突入したドイツ。

エジプト、バルカン半島に攻め入り、大火傷を負ったイタリヤ。

どちらも、モレスビーの占領後、オーストラリアの屈服を狙った日本とよく似ている。

いや、時系列上は、イタリヤのエジプト、バルカン侵攻やドイツのソ連侵攻が先だから、日本が盟邦の悪いところに倣ったというべきかもしれない。

「メジウロの基地化はどこまで進んでいる？」

「メジウロ本島の飛行場は、単発機であれば離着陸が可能などところまでこぎつけました。海兵隊の航空部隊が、既に展開しております」

ニミッツの問いに、メジユロ環礁の基地司令官ジヤック・エバンス少将は、飛行場に向かって右腕を大きく振りながら答えた。

エバンスが言った通り、駐機場にはグラマンF6F、ヘルキャット、やグラマンTBF、アベンジャーの姿が見える。

水上機基地には、コンソリデーターDPPBY、カタリナ、一二機が繋留^{けいりゅう}されている。

メジユロ占領後、真つ先に進出した機体だ。

「四発機の運用を可能とするまでには、もう少し時間を必要とします。一機、二機といった数ならまだしも、まとまった数を運用できる態勢^{たいせい}を整えるまでには、一ヶ月程度は見ていただかねばなりません」言葉が続けたエバンスに、ニミッツは問いを重ねた。

「タイラップ島、ジアリット島の基地施設は？」

「司令部棟^{へいしや}と兵舎は既に完成しております。一月三〇日までには、病院、食料庫、燃料庫が完成する予

定です」

「日本軍の反撃はどうかね？ メジユロ占領後、敵機の来襲はあったか？」

ニミッツは質問を替えた。

メジユロは合衆国軍にとり、次なる標的、すなわち太平洋における日本海軍最大の要衝^{ようしやう}トラック環礁を攻撃するための足場となる。

日本海軍の上層部、特に山本五十六の後を継いだ連合艦隊^{コンバインド・フリート}の司令長官沢本頼雄^{イソロク・ヤマモト}にとっては、相当な脅威に違いない。

「一月二四日と二五日に一度ずつ、二式大艇^{エミリ}が飛来しました。単機であり、偵察が目的だったと推察^{すいさつ}されます。いずれも、F6Fがメジユロの手前で捕捉^{ほそく}し、撃墜しました」

エバンスの参謀長を務めるロイ・アンドリュース大佐が、こともなげに答えた。

「潜水艦^{せんすいかん}はどうだ？」

ニミッツは、より気がかりなことを聞いた。

一昨年から昨年にかけて、日本軍は多数の潜水艦を珊瑚海やソロモン諸島の近海に派遣し、オーストラリアやガダルカナル島に物資を輸送する船団を攻撃している。

一連の戦闘で、合衆国は一〇四隻の輸送船と三七隻の護衛艦艇、及び膨大な量の補給物資や増援部隊の将兵を失ったのだ。

ニミッツ自身、潜水艦畑の出身であるだけに、水艦の脅威は熟知している。

「これまでのところ、カタリナと哨戒艦艇が潜水艦の動きを抑え込んでおります」

アンドリユースは、繋留されているカタリナを頼もしげに見やった。

ベネチアのゴンドラに翼を付けたような形状の飛行艇が、波に揺られて上下する様は、のどかさを感じさせる光景だが、この機体は潜水艦にとり、恐るべき死神だ。

珊瑚海では、オーストラリア本土に配備されたカ

タリナが、日本軍潜水艦を何隻も沈めており、大西洋でも、イギリス海軍に供与されたカタリナが、ドイツ海軍が誇るUボートを多数屠った実績を持つ。このメジユロでも、いち早く展開したカタリナが、基地建設用の資材を運んで来る輸送船を、日本軍の潜水艦から守っていた。

「外海だけを警戒すればよいわけではあるまい。日本軍には、二人乗りの小型潜水艇がある。小型潜水艇であれば、通常は使用しない幅の狭い水道からでも、環礁内に侵入できる」

ニミッツは注意を喚起した。

真珠湾攻撃が終わった後、湾口付近で、二人乗りの小型潜水艇が鹵獲されている。

日本軍は航空攻撃と併せて、軍港内に小型潜水艇を侵入させ、在泊艦船を雷撃しようとしていたのだ。

真珠湾では、小型潜水艇による被害は生じなかったものの、オーストラリアを巡る攻防戦では、シドニーやブリスベーン、タウンズビルの在泊艦船が、

同種の潜水艇による攻撃を受けている。

航空攻撃も、潜水艦による補給線の攻撃も無理となれば、小型潜水艇による泊地攻撃が行われる可能性が高い。

「カラライン水道以外の水道については、全て機雷で封鎖しております。潜水艇の侵入を許すことはいけません。」

「いいだろう」

アンドリュースの答を聞いて、ニミッツは頷いた。エバンス少将のチームは、現状で考え得る限りの防備態勢を固めてくれたようだ。

「浮きドックは、いつ到着するでしょうか？」

今度は、エバンスがニミッツに質問した。

合衆国海軍では、前線基地でも艦船の修理や整備を行えるよう、巨大な浮きドックを配備している。

戦艦や空母のような大型艦でも、収容が可能なものだ。

浮きドックがメジユロに配備されれば、太平洋艦

隊の艦船は、修理のためにハワイや本土西岸のサンディエゴまで戻る必要がなくなる。

「エスピリッツサント島で使っていたものを、メジユロに回航中だ。到着は二月八日前後になる」

「次期作戦は、浮きドック到着後に開始ですか？」

ニミッツは、苦い口調でエバンスに返答した。

「私自身は、というより太平洋艦隊司令部としてはそうしたいところだが、本国での調整が終わっていない。太平洋艦隊と南西太平洋方面連合軍の意志が、必ずしも一致しないのでね」

2

「かくも容易く、マーシャルが占領されるとはな」

連合艦隊司令長官沢本頼雄大將は、旗艦「武蔵」の長官公室に参集した幕僚たちを見渡し、重苦しい口調で言った。

連合艦隊司令長官に就任したときは中将だった

が、昨年一二月に昇進し、徽章はベタ金に桜三個のものに替わった。

参謀長酒巻宗孝少将以下の幕僚たちは、机を囲み、難しい顔で戦況図を睨んでいる。

昨年十一月、第四次珊瑚海海戦が終わった時点で、最前線は東方と南方に大きく張り出していたが、同海戦から四ヶ月と経たぬうちに、戦線は著しい縮小を余儀なくされていた。

「敵の来寇場所については、事前に予想されていたが、来寇時期については見通しが甘かったと言わざるを得ません。敵の新たな攻勢がこれほど早いとは、予想外でした」

酒巻が、政務参謀岡崎勲中佐をちらと見やった。「米軍は、守りの堅いラバウル、ラビではなく、手薄なマーシャル諸島を狙って来る可能性が高い」

第四次珊瑚海海戦の終了直後、岡崎はそのように予測し、作戦参謀山本祐二中佐、航空甲参謀樋端久利雄中佐らも賛成した。

沢本や酒巻は、岡崎の具申を容れ、マーシャル方面の防衛態勢強化について大本営と協議したが、時期を「昭和一九年四月以降」と見積もった。

第四次珊瑚海海戦は、辛勝という形ながらも、日本軍が勝利を収めている。

ポート・モレスビーの奪回を目指して来襲した敵機動部隊に多大な損害を与え、撃退したのだ。

特に、新鋭の正規空母エセックス級二隻と、小型空母ながら新鋭艦のインデペンデンス級一隻を沈めたのは大きい。

これだけの損害を与えた以上、米軍が戦力を再建し、再度の攻勢を試みるのは、半年ほど先になる、と考えたのだ。

ところが米軍の動きは、日本側の予想を越えていた。

彼らは僅か一ヶ月で機動部隊を再編制し、昨年二月一四日より、マーシャル諸島の南東に位置するギルバート諸島の攻略にかかったのだ。

日本軍は、同諸島のタラワ環礁、マキン島に、第三特別根拠地隊、佐世保第七特別陸戦隊等、総勢五四〇〇名の兵力を配置していたが、四日間の抗戦の末に陥落した。

ギルバート諸島を陥とした米軍は、一ヶ月後にはマーシャル諸島に襲いかかった。

メジURO環礁が真つ先に占領され、その五日後には、マーシャル諸島の中心地であるクエゼリン環礁が陥落した。

ギルバート、マーシャル両諸島が席卷されている間、連合艦隊主力は、反撃らしい反撃が一切できなかった。

第四次珊瑚海海戦で勝利を収めたとはいえ、第三艦隊は「飛龍」「龍驤」の二空母を失い、「翔鶴」「龍鳳」が被弾して、ドック入りを余儀なくされている。

ギルバートやマーシャルで、米軍の機動部隊と正面から対決する力はなかったのだ。

マキン島の沖で、第七潜水戦隊の伊号潜水艦三隻、呂号潜水艦八隻が、護衛空母一隻、輸送船六隻を撃沈したこと、及びクエゼリンに展開していた第二航空戦隊が、果敢な迎撃戦を展開し、艦戦、艦爆を合わせて六〇機の撃墜を報告したこと、タラワ、マキン、クエゼリンの地上戦闘で、上陸して来た米軍に多大な損害を与えたことが、この時期の日本軍に為し得る反撃の全てだった。

マーシャル諸島の陥落後、米軍はメジURO環礁に大量の資材を運び込んだようだが、同地に集結している兵力や、基地建設の進捗状況は判明していない。

トラックからメジUROに、二式大艇二機が索敵に飛んだが、両機とも未帰還になっている。

おそらく、敵の戦闘機に襲われ、無電を打つ間もなく撃墜されたのだろう。

「今に思うと、メジUROに兵力を配置しなかったことが悔やまれます」

「配置しても同じことだったろう。四、五〇〇〇名程度の根拠地隊が、敵の空襲や艦砲射撃、上陸部隊の猛攻に耐え、メジユロを死守し得たとは考えられない」
 首席参謀高田利種大佐の一言に、酒巻はかぶりを振った。

無益な犠牲を出さずに済んだだけ、マーシャル諸島の他の根拠地や、タラワ、マキンよりましだった、と言いたげだった。

「肝心なのは、これ以上敵を前進させないことだ」
 沢本が力のこもった声で言い、戦況図を指示棒で軽く叩いた。

現在の最前線は、ビスマルク諸島のニューブリテン島ラバウルと、連合艦隊司令部が置かれているトラック環礁——開戦前から帝国海軍が整備を進めて来た中部太平洋最大の要衝だ。

昨年初めから、約一年に亘って、豪州本土からの攻撃を支え続けたラビは、ギルバート諸島の陥落とほぼ同時期に放棄し、撤収している。

米軍は年明け早々、ポート・モレスビーを奪回し、ニューギニア、ソロモンの二正面から、ラバウルを脅かしているのだ。

トラックは、まだ敵の攻撃を直接受けていない。環礁周辺には、敵の潜水艦が出没し、トラックに物資を運んで来る輸送船を脅かしているが、在泊艦艇に被害はなく、トラック上空に敵機が姿を見せることもない。

米軍の次の目標が、ラバウルになるのか、トラックになるのかは判然としないが、両方に充分な兵力を配置する余裕は、今の日本軍にはない。

米軍の前進を阻むためには、敵の動きを正確に読み、来寇場所を特定する必要があった。

「敵は六分四分、いや七分三分の確率でトラックに来る。私は、そのように考えます。トラックを攻略すれば、ラバウルは立ち枯れになり、労せずして無力化できるからです」

「首席参謀の御意見に賛成です。米軍がメジユロの

基地化を推進しているのは、トラック攻略の足場にするためであると考えられます。基地の完成後は、日を経ずしてトラックに侵攻して来るでしょう」

高田利種首席参謀の発言に、山本祐二作戦参謀が同調した。

航空甲参謀樋端久利雄中佐、同乙参謀吉岡忠一少佐、戦務参謀鷹尾卓海少佐といった幕僚たちも、

「トラックに来るとの前提で、迎撃準備を整えるべきと考えます」

と主張した。

「政務参謀、政治上の理由から、米軍がトラックよりもラバウルの攻略を優先する可能性はないだろうか？」

酒巻が、岡崎に質問の鋒先を向けた。

「現在の情勢下では、その可能性は小さいと考えます。豪州方面の連合軍がポート・モレスビーの奪回を最優先事項としていたのは、豪州の安全が脅かされ、連合国から脱落する可能性が考えられたためで

す。ですが、そのモレスビーは連合軍の手に落ちました。ラバウルは今なお我が軍の手中にあります。が、同地から直接豪州本土を脅かすことはできません。ラバウルの奪回は、連合軍にとり、モレスビー奪回ほどの緊急性はありません」

「貴官も、敵はトラックに来ると考えるのか？」

「現時点では断言できません。私も、敵はトラックに来る可能性が高いと考えますが、ラバウルに絶対来ないと断言することもできません。連合国の、政治面に関する情報が不足しておりますので」

岡崎の口調は、いつになく歯切れが悪い。

できることなら、米軍の作戦目標を絞り込みたいが、情報不足の状態で無責任な答は出せない。

断定できないものは断定できないと伝えることが、参謀としての誠意だった。

「敵がトラックに来る可能性は高いが、ラバウルに来ないとも断言できない、か。バルチック艦隊が対馬に来るか、津軽に来るかで、最後まで悩まれた東

郷長官（東郷平八郎大将。日露戦争時の連合艦隊司令長官）の心境だな」

沢本の言葉を受け、樋端が発言した。

「トラックとラバウルの両方を守ることは、不可能ではないと考えます。敵の目標がトラックであれ、ラバウルであれ、機動部隊を前面に押し立てて来ることは確実です。必然的に、我が方も航空兵力で迎撃することになります。幸い、二つの根拠地の距離は、さほど離れていません。敵がトラックに來た場合には、ラバウルの航空兵力をトラックに移動させる。ラバウルが攻撃された場合には、逆にトラックの兵力をラバウルに移動させるといった策を採ってはいかがでしょうか？」

「トラック、ラバウルを連携させつつ戦うということとか？」

酒巻の問いに、樋端は頷いた。

「素敵を綿密に行い、敵の來寇場所を早期に特定できれば、不可能ではないと考えます」

「我が方の機動部隊はどうなのだ？ 第四次珊瑚海海戦では、機動部隊とラビの基地航空隊が協同することで、敵の撃退に成功している。同海戦から三ヶ月が経過した現在、第三艦隊も戦力を回復したと考えるが」

肝心なことを忘れていないか——そう言いたげな口調で、沢本が自ら発言した。

第一次珊瑚海海戦から第四次珊瑚海海戦で、勝利の立役者となつて來たのは、常に機動部隊なのだ。敵の機動部隊に対しては、こちらも機動部隊をぶつければ、勝利は得られるはずだ、と主張したい様子だった。

「彼が戦力を比較しますと、機動部隊戦で勝利を収めるのは困難と考えざるを得ません。『加賀』『翔鶴』の修理と改装工事の完了、小型空母『千代田』の戦列加入で、使用可能な空母は八隻になりましたが、第四次珊瑚海海戦で消耗した航空兵力の補充がまだ終わっていません。現状で使用可能な空母は、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。